

2014年度

博士学位申請論文
(要約)

主査 外池 滋生 教授

論文題目

主語からの抽出：編出分析による説明

On Extraction from Subjects: An Excorporation Account

青山学院大学大学院

文学研究科

英米文学専攻

江頭 浩樹

On Extraction From Subjects: An Excorporation Account

論文要約

江頭浩樹

第 1 章 Goals and the Framework

本論文は、初期の生成文法で提唱されていた主語条件を、Tonoike (2008)による編出分析(Excorporation Analysis)によって再分析し、現在主流の言語理論である極小主義(Minimalism)での位置づけを明らかにした研究である。

第 1 章ではこの論文が扱う現象である「主語条件」が導入され、この条件が初期の生成文法から現在までどのような分析を受けていたかが示される。主に扱われた現象は(1)に挙げるようなものである。

(1) *Of which car did the driver cause a scandal?

しかし、他のデータを検討すると、主語からの取り出しが容認されるような現象が、存在することが示唆されている。この論文では、そのようなデータを手掛かりに、どのように主語条件が捉えなおされるべきかを明らかにすることを、主な目標として示されている。

以下は、この論文で採用される理論の枠組みである、一連の Chomsky による極小主義が導入される。中でも Chomsky (2008)の位相理論が導入される。

第 2 章 On the Subject Condition

第 2 章では(1)に挙げる「主語条件」が Chomsky (2008)ではどのように分析されているかが示されている。これによると、(1)は主節の CP 位相では(2)の様な形をしている。

(2) [CP C_[EF] [TP the driver of which car [T' T (did) [v*P the driver of which car
[v*_v v*-cause

(2)では、wh 句を含んだ主語が v*P 指定部から TP の指定部に、v*P 指定部にコピーを残しながら移動を受けている。派生の次の段階では、EF (Edge Feature)を持つ C がその指定部に wh 句を誘引する。その際の移動の候補の wh 句は 2 つ存在している。一つは v*P 指定部にある wh 句、もう一つは TP 指定部にある wh 句である。前者の移動は既に通過した位相からの取り出しはコストがかかるとする局所性の条件(Locality Condition)によって排除される。もう一つの移動である TP 指定部からの移動は、(3)の不活性条件(Inactivity Condition)によって排除される。

(3)不活性条件

A 連鎖の主要部は、その解釈不能な素性に値が与えられると、更なる統語計算にとって不可視になる。

(2)の TP 指定部にある DP の the driver of which car は格素性が与えられ、更なる

統語計算に当たる wh 移動が不可能になる。これが Chomsky (2008)の主語条件の説明である。

第2節では第1節で示した方法では説明できない現象があることが示される。その具体的な例が、次の(4)である。

(4) a. Of which major is it important for the students____to take a course
in physics?

b. Of which car is it likely that the driver____caused a scandal? (Kobayashi 2009)

(4a)では, for で導かれる不定詞主語が部分摘出を受けている。(4b)では定形の従属節の主語が部分摘出を受けている。いずれの主語も格を付与されているので, そのような位置からの部分摘出は(3)の不活性条件に抵触し(4)は非文法的と予測されることになるが, 事実そうではない。

第3節以降は, これらの事実の説明を試みる。そのための道具立てとして, Tonoike (2008)で提案されている編出分析(Excorporation Analysis)を導入する。この分析は, 英語の文(または句)構築を, 従来の主要部移動が持つ問題(拡張条件(Extension Condition)の違反 など)を回避するための代案である。この分析によれば, 英語の文構築のために次の(5)を想定する。

- (5) a. 英語では C と T そして v^* と V は, 辞書から C-T そして v^*-V の語彙複合体として辞書から引き出される。
b. v^*-V がその補部と併合した後は, v^* は編出し既に構築した VP と併合し v^* の投射を形成し, 外項も v^*P に併合される。
c. C-T が v^*P と併合し T の投射を形成した後, C は編出し TP と併合し, C の投射を形成する。

(6)を例に(5)がどの様に形成されるかを検討する。

(6) We build an airplane.

(6)の v^*P 位相では, (7)の様に語彙複合体 v^*-V は an airplane と併合し VP を形成する。

(7) [_{VP} v^* -build_[ACC] [_{DP} an airplane_[]]]

ここで, 本動詞は格素性を持つと想定し, 格付与に関して Tonoike (2008)の格付与理論(8)を想定する。

(8) 英語では, 格は格付与範疇への併合によって付与される。

(8)によると(7)で an airplane は格を付与される。

(9) [_{VP} v^* -build_[ACC] [_{DP} an airplane_[ACC]]]

派生の次の段階で, v^* が編出し VP に併合することになるが, その際には本動詞の音声を伴って編出する。(10)の/.../は音声を{...}は意味を表す。

(10)[_{v^*P} v^* -/build/ [_{VP} {build} [_{DP} an airplane_[ACC]]]]

(10)における音声を伴った移動は, (11)の可視統語論仮説のためである。

(11) 可視統語論仮説(Overt Syntax Hypothesis)

内部併合(Internal Merge)は音を伴った要素を対象にする.

(11)によると, 内部併合(移動)は必ず音を伴わなければならない.

(10)に外項(you)が併合されと v*の投射が完成し, VP は転送(Transfer)を受ける.

(12)[_{v*P} you_i] [_{v*} v*-build [_{VP} ~~{build}~~ an airplane]]

派生の次の段階で(12)に C-T が併合し, T の投射を形成する. その際 T は格素性 [NOM]を持っている.

(13)[_{TP} C-T_[NOM] [_{v*P} you_i] [_{v*} v*-build]]]

格を付与されていない you_i は(8)によって T_[NOM]に併合する.

(14)[_{TP} you_[NOM] [_T C-T_[NOM] [_{v*P} {you} [_{v*} v*-build]]]]

派生はこの段階で完結する. C が(14)から編出することはない. というのは, C は音声を持たないので, Cを編出することは(11)の可視統語論仮説の違反になる. Tを伴った場合も Cは編出できない. Tも音形を持たないからである. ただし Tが音形を持つ場合, 例えば do などを持つ場合は Cは doを伴って編出し, Cの投射を形成できる.

(15)[_{CP} C-do [_{TP} they build a airplane]]?

ここで, (14)に戻ろう. (14)では文全体の範疇は TP のラベルが与えられているが, (14)が動詞 think の補部に埋め込められた場合は, 動詞 think の選択素性上 CP でなければならない.

(16)I think [_{CP} they will build an airplane].

そこで(14)の範疇ラベルは, TP であると同時に CP であると想定する.

これが, 転出分析による英語の節構築である.

この分析を念頭に(4a)を再分析しよう. ここで, for で導かれる主語を持つ不定詞補文の派生として, 次の(17)を想定する.

(17)a.英語の for で導かれる不定詞補文では, 空の補文標識 C と for と to は語彙複合体 C-for-to として辞書から取り出される.

b.この複合体は既に構築した構造から編出する.

c.いわゆる不定詞補文標識 for は T に属し, to は M に属する.

(17)を念頭に(18)の派生を考えてみよう.

(18) It is important for them to take a course in physics.

(18)の派生が, v*P まで進んだと仮定しよう. (19)では VP は転送を受けている.

(19)[_{v*P} them_i] [_{v*} v*-/take/ [_{VP} ~~{take}~~ a course in physics]]

これに C-T_[ACC]-to が併合すると, (20a)が派生される. さらに C-for が編出し MP と併合すると, (20b)に見られるように, TP を形成する.

(20)a. [_{MP} C-for_[ACC]-to [_{v*P} them_i] [_{v*} v*-/take/]]]

b. [_{TP} C-for_[ACC] [_{MP} to [_{v*P} them_i] [_{v*} v*-/take/]]]]

派生の次の段階で、 v^*P の指定部にある *them* は格を求めて、TP の指定部に内部併合(移動)を受ける。

(21) $[_{TP} /them_{[ACC]} / [_{T'} C\text{-for}_{[ACC]} [_{MP} to [_{v^*P} \{them\}_{v^* v^*-/take/}]]]]]$

さらに、C が *for* を伴って(21)から編出し TP に併合すると不定詞補文が完成する。

(22) $[_{CP} C\text{-for} [_{TP} /them_{[ACC]} / [_{T'} \{for\} [_{MP} to [_{v^*P} \{them\}_{v^* v^*-/take/}]]]]]]$

この派生を念頭に置いて、(4a)―以下(23)として採録―を再検討しよう。

(23) Of which major is it important for the students to take a course in physics?

派生が補文の CP(24)まで進んだと仮定しよう。(24)では不定詞補文の主語が TP 指定部で格を付与されている。

(24) $[_{TP} /the\ students\ of\ which\ major_{[ACC]} / [_{T'} C_{[EF]}\text{-for}_{[ACC]} [_{MP} to [_{v^*P} \{the\ students\ of\ which\ major\}_{v^* v^*-/take/}]]]]]$

次に[EF]を持つ C が *for* を伴って(24)から編出し併合し CP を形成する。

(25) $[_{CP} C_{[EF]}\text{-for} [_{TP} /the\ students\ of\ which\ major_{[ACC]} / [_{T'} \{for\} [_{MP} to [_{v^*P} \{the\ students\ of\ which\ major\}_{v^* v^*-/take/}]]]]]]$

[EF]を持つ C が探査子(probe)として働き *wh* 句を探査する。(25)には 2 つの *wh* 句が存在する。一つは v^*P の指定部にある *wh* 句、もう一つは TP の指定部にある *wh* 句である。前者の *wh* 句の CP 指定部への内部併合は(11)の可視統語論仮説に違反する、なぜならば v^*P 指定部にある要素は音形を持たないからである。後者の *wh* 句の移動もまた(3)の不活性条件によって規制される。このままだと、文法的な文(23)は派生されないことになる。そこで不活性条件を(26)の様に改定する。

(26) 改定不活性条件 (Revised Inactivity Condition)

A 連鎖を率いる主要部 D と N は、その解釈不能な素性に値が与えられると、更なる統語計算にとって不可視になる。

(26)は D と N が不可視になることを述べているが、ドイツ語においては D と N に格が付与されることを考慮に入れば、不自然なことではない。

(26)に従えば TP 指定部にある PP of which car は不活性要素ではないのでさらに取り出しができ、(23)がうまく派生される。

(4b)―(27)として採録―も同様の方法で派生される。

(27) Of which car is it likely for the driver caused a scandal?

(27)の派生が従属節の CP 位相(28)まで進んだと仮定しよう。(28)では the driver of which car が TP 指定部に移動し、補文標識 *that* は[EF]を持っている。

(28) $[_{CP} that_{[EF]} [_{TP} /the\ driver\ of\ which\ car / [_{T'} T_{[NOM]} [_{vP} \{the\ driver\ of\ which\ car\}_{v^* v^*-/caused\ \dots}]]]]]$

(28)では TP 指定部にある the driver of which car は主格を与えられているが、不活性になっている要素は D と N なので、PP は CP 指定部へ内部併合を受けるこ

とができる。

以上が編出分析による主語条件の説明である。しかし、(1)―(30)として採録一の非文法性の説明がまだ残っている。

(30) *Of which car did the driver cause a scandal?

(26)の RIC に依存する現行の編出分析は、(30)を許容してしまう。この問題を解決するために、wh 移動は焦点化素性による焦点化移動とする Tonoike (2000)の分析を採用する。Tonoike は解釈可能な焦点化素性[F(ocus)]素性が移動の対象となる DP の指定部に付与され、その素性を持つ DP が移動を受けると分析している。例えば次の(31)を見てみよう。

(31)a. **Which reports** does the government prescribe the colors of the covers of *t*?

b. **The covers of which reports** does the government prescribe the colors of *t*?

c. **The colors of the covers of which reports** does the government prescribe *t*?

(31)では移動の対象の名詞句が異なっている。これは、[F]がどの DP の指定部に与えられているかで説明可能である。

(32)a. [_{DP1} the colors of [_{DP2} the covers of [_{DP3} [F] which reports]]]

b. [_{DP1} the colors of [_{DP2} [F] the covers of [_{DP3} which reports]]]

c. [_{DP1} [F]the colors of [_{DP2} the covers of [_{DP3} which reports]]]

(31a)は[F]が DP3 の指定部に付与された場合に、(31b)は DP2 の指定部に、(31c)は DP1 の指定部に付与された場合に、派生される。

この説明を念頭に、(30)を検討しよう。ただし位相主要部 *v** と C に[uF]が付与されると想定する。また(30)の主語の構造は、次の(33)であり、[F]は一番上の DP 指定部または PP 指定部に付与されると考えられる。

(33)a. [_{DP} the driver [_{PP} [F] of which car]]

b. [_{DP} [F] the driver [_{PP} of which car]]

まず(33a)のケースから検討しよう。派生が(34)の *v*P* 位相まで進んだと仮定する。

(34) [_{*v*P*} [_{DP} the driver [_{PP} [F] of which car]] [_{*v**} *v**_[uF] -/caused/]]

(34)の構造では、PP の指定部にある[F]は *v** が持つ[uF]の照合領域にないために、派生はこの段階で破綻してしまう。つまり、PP of which car が取り出される文は生成されないことになる。

次に(33b)が *v*P* の指定部に併合されたと、仮定しよう。

(35) [_{*v*P*} [_{DP} [F] the driver [_{PP} of which car]] [_{*v**} *v**_[uF] -/caused/]]

(35)において、DP 指定部にある[F]が DP 全体に浸透(percolate)すると仮定すると、*v*P* の指定部にある主語全体は *v** の照合領域にあり *v** の[uF]は照合される。(35)に C_[uF]-T_[NOM]の複合体が併合され the driver of which car が格を求め更に上昇すると、(36)が派生される。

(36) [_{CP/TP} /[F] the_[NOM] driver of which car [_{T'} C_[uF]-T_[NOM] [_{*v*P*} {the driver of which

car}{_{v*} v*-/caused/

(36)でも、C が持つ[uF]は TP 指定部にある DP によって照合可能である。照合すべき解釈不能な素性は何も残されていないので、派生はこの時点で収束する。言い換えれば、(37)が収束派生の文として生成される。

(37) The driver of which car caused a scandal?

ここで、(36)では wh 句がその作用域をとることができる CP がないことが問題になるかもしれないが、(36)の一番上の統語範疇は TP であると同時に CP でもあることに注意されたい。

第3章 Total Extraction

第2章では、主語からの部分抽出を分析したが、第3章は(1)に見られる全体抽出を検討する。

- (1) a. ***Who** is it important for **t** to take a course in physics?
 b. ***Who** do you think that **t** will see Mary?
 c. **Who** do you think will see Mary?

まず、(1a)の非文法性から検討する。派生が v*P 位相まで進んだと仮定しよう。そこでは主語の who が v*P 指定部に生成されている。また who の格素性は未指定であり、指定部には[F]がある。

(2) [_{v*P} [_{DP} [F]who_[]] [_{v*} v*-take [_{VP} {take} [_{DP} a course in physics}]]]

(2)に C_[uF]-for_[ACC]-to が併合し MP を形成し(3a), C_[uF]-for_[ACC]が編出し MP に併合し TP を形成し、who が格を求めて TP 指定部に内部併合を受けると、(3b)のようになる。

- (3) a. [_{MP} C_[uF]-for_[ACC]-to [_{v*P} [_{DP} [F]who_[]] [_{v*} v*-take
 b. [_{TP} /_{DP}[F] who_[ACC]/ [_{T'} C_[uF]-for_[ACC] [_{MP} to [_{v*P} {who} [_{v*} v*-take/

さらに、C-for_[uF]が編出し(3b)に併合し CP を形成すると(4)のようになる。

(4) [_{CP} C_[uF]-for [_{TP} /_{DP}[F] who_[ACC]/ [_{T'} C_[uF]-for_[ACC] [_{MP} to [_{v*P} {who} [_{v*} v*-take/

ここで、[uF]を持つ C が探査子として作用し、TP 指定部にある who を見つけ、それを誘引しようとする。しかし、who の CP 指定部への誘引は(26)―以下(5)として採録―の違反になる。

(5) 改定不活性条件 (Revised Inactivity Condition)

A 連鎖を率いる主要部 D と N は、その解釈不能な素性に値が与えられると、更なる統語計算にとって不可視になる。

疑問詞 who 自身が D であり、その構造は次の(6)である。

(6) [_{DP} [F] [_D who_[ACC]]]

いわゆる(1a)に見られる for 痕跡効果は、改訂不活性条件の違反に帰することができる。

次に(1b)~(1c)の that 痕跡効果について見てみよう。ここで次の(7)を想定す

る.

- (7) 顕在的補文標識 *that* は T と語彙複合体を形成しないが、
空の補文標識 C は T と語彙複合体を形成する。

(7)をもとに、まず(1b)を検討しよう。派生が(8)の v^*P 位相まで進んだと仮定しよう。(8)では主語が v^*P の指定部に生成され、VP は転送を受けている。

- (8) [v^*P [DP[F]who_[]][$v^* v^*/see/$ [~~v^*P~~ {~~see~~} Mary]]]

(8)に(9a)に見られるように $T_{[NOM]}$ -M(will)が併合し MP を形成し、さらに $T_{[NOM]}$ -/will/が編出し MP に併合し、主語の who_[]が格を求めて T に内部併合を受けると、(9b)のようになる。

- (9) a. [_{MP} $T_{[NOM]}$ -will [_{v^*P} [DP[F]who_[]][$v^* v^*/see/$]]]

- b. [_{TP} [DP[F]who_[NOM]] [_{T'} $T_{[NOM]}$ -/will/ [_{MP} {will} [_{v^*P} {who}][$v^* v^*/see/$

(9b)では、D である *who* に格素性[NOM]が付与されていることに注意されたい。

(9b)に[uF]をもつ *that* が併合すると(10)が得られる。

- (10)[_{CP} *that*_[uF] [_{TP} [DP[F]who_[NOM]] [_{T'} $T_{[NOM]}$ -/will/ [_{MP} $T_{[NOM]}$ -{will} [_{v^*P} {who} [$v^* v^*/see/$

*That*_[uF]は探査子として働き TP 指定部にある[F]を持つ *who* を見つけるが、*who* は CP の指定部に内部併合を受けることができない。というのは先にみたように *who* は D であり格素性が与えられると不活性になり、そのような要素に内部併合をかけることは改訂不活性条件の違反になる。これが *that* 痕跡効果の説明である。

次に文法的な(1c)を分析する。派生が埋め込み文の CP 位相まで進んだと仮定しよう。(11)では *who* が TP 指定部に内部併合を受け主格が付与されている。

- (11)[_{TP} [DP [F]who_[NOM]] [_{T'} C_[uF]- $T_{[NOM]}$ -will [_{v^*P} {who}][$v^* v^*/see/$

ここで、*who* の指定部にある[F]が DP 全体に浸透するという議論を想起されたい。だとすると *who* は[uF]を持つ C の照合領域にあることにあり、C の[uF]は(11)の段階で照合を受けることになる。また従属節全体のラベルは(12)で示すように TP であると同時に CP でもある。

- (12)[_{CP/TP} [DP [F]who_[NOM]] [_{T'} C_[uF]- $T_{[NOM]}$ -will [_{v^*P}

さらに派生が(13)の主節の v^*P まで進んだと仮定しよう。(13)では $v^*_{[uF]}$ -*think* が編出併合を繰り返し、 v^* の投射を形成し外項の *you* が v^*P の指定部に併合されている。

- (13)[_{v^*P} *you* [_{$v^* v^*_{[uF]}$} -*think* [_{VP} {think}][_{CP/TP} [DP [F]who_[NOM]] [_{T'} C_[uF]- $T_{[NOM]}$ -will [_{v^*P} {who} [$v^* v^*/see/$

(13)の主節の[uF]を持つ v^* は探査子として働き、[F]を持つ *who* を見つけ、*who* は v^*P 指定部に内部併合を受ける。一見するとこの内部併合は(5)の改訂不活性条件を破っているように見える。しかし、*who* が占める位置を考慮に入れると、

who の内部併合が改定不活性条件を破っていないことがわかる。すなわち主節の v* から見ると、who が占める位置は A' 位置の CP 指定部である。このことは主節の動詞 think が、CP を選択するという語彙性質を持つことから明らかである。改定不活性条件は、解釈不能な素性に値を与えられた A 連鎖を率いる D と N を規制する規則である。(13) の who は CP の指定部にあることから A' 連鎖を率いているので、改定不活性条件の規制を受けず、v*P 指定部に内部併合を受けることができる。

- (14) [_{v*P} /DP[F]who_[NOM]]/ [_{v*} you [_{v*} v*_[uF]-think [_{VP} {think}]{_{CP/TP} {who}}
[_T C_[uF]-T_[NOM]-will [_{v*P} {who} [_{v*} v*_[uF]-see/

さらに、派生が主節の CP まで続けると(15)が得られる。

- (15) [_{CP} /DP[F]who_[NOM]]/ [_C C_[uF]-do [_{TP} /you/ [_{v*P} {who} [_{v*} {you} [_{v*} v*_[uF]-think
[_{VP} {think}]{_{CP/TP} {who}} [_T C_[uF]-T_[NOM]-will [_{v*P} {who} [_{v*} v*_[uF]-see/

以上が、編出分析による主語の全体摘出の説明である。

第 4 章 Extraction from Objects

第 4 章では、(1)に見られる動詞および前置詞の目的語からの取り出しについて検討する。

- (1) a. *Who* will you see *t*?
b. *Which city* will you live in *t*?

ここで採用している理論に従うと、(1)の疑問詞は動詞と前置詞に併合した時点で格を付与されることになり、改定不活性条件により疑問詞は不活性になり、主節の CP 指定部に内部併合を受けられないことになる。しかし(1)の文の文法性が示すように、この分析は支持されない。

これを解決する方法として、Egashira&Tonoike (2010)(以下 E&T)は格付与と位相主要部による wh 句の認定(identification)が同時に起こる場合は、不活性条件を破って wh 移動が可能であるという分析を示した。

- (2) a. [_{VP} v*-see_[ACC] [_{DP} who_[ACC]]]
b. [_{PP} v*-live-in_[OBL] [_{DP} which_[OBL] city]]

(2a)では v*-see の語彙複合体が、(2b)では v*-live-in の複合体がそれぞれ補部の DP との併合によりその補部に格を与え、それと同時に位相主要部の v*が c 統御のもとに wh 句を認定している。

しかし、この分析は動詞と前置詞の目的語の取り出しにはうまく作用するが、主語の取り出しにはうまく作用しない。というのは wh 句への主格の付与と、位相主要部 C による認定が同時に起こることはないからである。次の(3)を検討しよう。

- (3) a. [_{v*P} who_[] [_{v*} v*_[uF]-see/[_{VP} {see} Mary]]]
b. [_{TP} C_[uF]-T_[NOM] [_{v*P} who_[] [_{v*} v*_[uF]-see/[_{VP} {see} Mary]]]]

c. $[_{TP} / [F] \text{who}_{[NOM]} / [_{TP} C_{[uF]} - T_{[NOM]}] [_{v^*P} \text{who}_{[]} [_{v^*} v^* - / \text{see} /$

(3c)では, **who** は格を付与されるために, TP 指定部に内部併合を受けているが, 位相主要部 C は **who** を c 統御しないために **who** を認定できない. にもかかわらず, (4)に見るように, この **who** はさらに内部併合を受けることができる.

(4) Who do you think will see Mary?

ここでもう一度主語の取り出しを可能にする現象である(4)を再検討しよう. 第3章では, (4)の文法性を従属節の統語範疇の2面性に求めた.

(5) $[_{v^*P} , \text{you} [_{v^*} v^*_{[uF]} - \text{think} [_{VP} \{ \text{think} \}]_{[CP/TP]} [_{DP} [F] \text{who}_{[NOM]}]] [_{T^*} C_{[uF]} - T_{[NOM]} - \text{will}]$
 $[_{v^*P} \{ \text{who} \} [_{v^*} v^* - / \text{see} /$

従属節内の T から見ると **who** は TP 指定部の A 位置にあるが, 主節の v^* から見ると **who** は CP 指定部の A' 位置にある. 後者によって **who** は格を与えられていても不活性条件を破ることなく, 内部併合を受けることができる.

この分析を念頭に(1)の v^*P 位相を再検討しよう.

(6) a. $[_{VP} v^*_{[uF]} - \text{see}_{[ACC]} [_{DP} [F] \text{who}_{[ACC]}]]$
 b. $[_{v^*P} \text{you} [_{v^*} v^*_{[uF]} - / \text{see} / [_{VP} \{ \text{see} \}]_{[DP} [F] \text{who}_{[ACC]}]]]]$

(6a)の段階で動詞 **see** はその補部が併合されると対格を付与する, そしてこの位置を A 位置と認定する. この V による認定が v^*P 位相まで続くと仮定する. さらに(6b)に示す様に, $v^* - / \text{see} /$ が編出し v^* の投射を形成し主語をその指定部に併合する. その際 $[uF]$ を持つ v^* が探査子として働き, **who** を見つけ, これを指定部に内部併合しようとするわけだが, この時 v^* は VP の補部にある **who** を単一 A' 連としてみている. 従ってこの **who** は格を与えられているが, A' 位置を占めているので改訂不活性条件の規制を受けずに内部併合を受けることができる. この分析は E&T の分析—wh 句の格付与と位相主要部による wh 句の認定が同時に成立する場合は活性条件の規制を受けない—to 原理的説明を与えるものである.

第5章 Extraction from Subjects of Passive and Unaccusative Predicates

この章では, (1)に見られる受動文における主語からの取り出しを検討する.

(1) a. Of which car was the driver arrested?
 b. The driver of which car was arrested?

この文の文法性を説明するにあたり, 受動態の述部として VP の上に機能範疇 αP を想定する. この機能範疇 α は動詞が持つ格素性を吸収する機能と, 受動態動詞の形態の照合をする機能を持つ. さらにこの機能範疇 α は本動詞と語彙複合体を形成し, 転出を受け αP を形成する.

(2) a. $[_{VP} \alpha - \text{arrested}_{[ACC]} [_{DP} \text{the}_{[]} \text{driver of which car}]]$
 b. $[_{\alpha P} \alpha - / \text{arrested} / [_{VP} \{ \text{arrested} \}]_{[DP} \text{the}_{[]} \text{driver of which car}]]]$

ここで派生が(3)の CP 位相まで進んだと仮定しよう. (3a)では $C_{[uF]} - T_{[NOM]} - \text{be (was)}$

が併合され、be の投射が形成される。(3b)では T が/was/と共に編出し TP を形成する。

- (3) a. [_{beP} C_[uF]-T_[NOM]-was [_{αP} α-/arrested/ [_{VP} {arrested} [_{DP} the_[] driver of which car]]]]
 b. [_{TP} C_[uF]-T_[NOM]-was [_{beP} [_{αP} α-/arrested/ [_{VP} {arrested} [_{DP} the_[] driver of which car]]]]]

さらに(3b)の T_[NOM]は探査子として働き、the driver of which car を見つけ、これを指定部に内部併合し格を付与する。

- (4) [_{TP}[_{DP} the_[NOM] driver of which car] [_{T'}] C_[uF]-T_[NOM]-was [_{beP} [_{αP} α-/arrested/ [_{VP} {arrested} {_{DP} the_[] driver of which car}]]]]]

ここで派生主語の内部構造を再検討しよう。第 2 章で見たように解釈可能な焦点化素性[F]は、DP 指定部(5a)、PP 指定部(5b)に付与される。

- (5) a. [_{DP} [F]the driver [_{PP} of which car]]
 b. [_{DP} the driver [_{PP} [F]of which car]]

(4a)の主語の構造が(5a)だと仮定しよう。

(6) [_{TP}[_{DP} [F]the_[NOM] driver of which car] [_{T'}] C_[uF]-T_[NOM]-was
 [F]が DP 指定部に付与されていると、[F]が全体の DP に浸透し C が持つ[uF]の照合領域に入るので、C の[uF]は照合可能である。すべての解釈不能な素性は照合されたので、派生はこの時点で収束し、(1b)が派生される。

一方主語の構造が(5b)だと仮定しよう。(4a)の主語が(5b)だとすると次の(7)が得られる。

- (7) [_{TP}[_{DP} the_[NOM] driver [_{PP} [F] of which car]] [_{T'}] C_[uF]-T_[NOM]-was
 次に C_[uF]-T-/was/が編出し C の投射を形成する。

(8) [_{CP} C_[uF]-T-/was/[_{TP}[_{DP} the_[NOM] driver [_{PP} [F] of which car]]]
 ここで、[uF]を持つ C は探査子として働き[F]を持つ of which car を見つけ、それを C の指定部に内部併合する。この内部併合は改定不活性条件の規制は受けない。なぜならば、不活性要素は格を与えられた D と N であり、PP は不活性要素ではないからである。

さらにこの章では、(9)に見られる様な非対格動詞の主語からの取り出しも分析される。

- (9) a. Of which drugs did traces remain in the blood? (Radford 2009:437)
 b. Of which drugs did there remain traces in the blood? (Ibid.)

まず(9a)から分析する。(9a)の様な非対格動詞の派生と構造に対して、v-V-Pred の語彙複合体を想定する。まず v-remain-Pred が PP の in the blood を補部に、主語の DP の traces of which drugs を指定部に併合し PredP を形成する。

- (10) [_{PredP} [_{DP} D_[] traces [_{PP} [F]of which drug]] [_{Pred'} v-remain-Pred

[_{PP} in the blood]]]

さらに v-/remain/が(10)の構造より編出し VP を形成する．さらに v-/remain/が VP より編出し vP を形成する．

(11) [_{VP} v-/remain/ [_{VP} {remain} [_{PredP} [_{DP} D_[] traces [_{PP} [F]of which drug]]
[_{Pred'} {remain} [_{PP} in the blood]]]]]

(12a)に見られる様に(11)の構造に C_[uF]-T_[NOM]-did が併合し T の投射を形成する．さらに DP traces in the blood が TP 指定部に内部併合を受け, 主格を付与される．

(12)a. [_{TP} C_[uF]-T_[NOM]-did [_{VP} v-/remain/ [_{VP} {remain} [_{PredP} [_{DP} D_[] traces
[_{PP} [F]of which drug]]_{[Pred' {remain} [_{PP} in the blood]]]]]}

b. [_{TP} [_{DP} D_[NOM] traces [_{PP} [F]of which drug]]<sub>[T' C_[uF]-T_[NOM]-did [_{VP} v-/remain/
[_{VP} {remain} [_{PredP} {traces of which drug} [_{Pred'} {remain} [_{PP} in the blood]]]]]</sub>

さらに, C-T-did が TP より編出し TP と併合し C の投射を形成する．

(13) [_{CP} C_[uF]-T-did [_{TP} [_{DP} D_[NOM] traces [_{PP} [F]of which drug]]]...

(13)で[uF]を持つ C が探査子として作用し, of which car を見つけそれを CP 指定部に内部併合する．この内部併合は改定不活性条件の規制を受けないことは言うまでもない．

(14) [_{CP} /_{PP} [F]of which drug /C_[uF]-T-did [_{TP} [_{DP} traces {of which drug}

以上の方法で, (9a)が生成される．

次に(9b)を分析する．There 構文の派生には v-remain_[PART]-Pred を想定し, 本動詞 remain は部分格(PARTIVE)を持つと想定する．派生の初期には(15)のような構造が得られる．(15)では PP が Pred の補部に併合され, traces of which drug はその指定部に併合され PredP が構築される．

(15) [_{PredP} D_[] traces of which drugs [_{Pred'} v-remain_[PART]-Pred [_{PP} in the blood]]]

次の派生の段階で, (16a)で見られる様に v-remain_[PART]が編出し VP を形成する, そして(16b)に見られる様に the driver of which car は VP の指定部に内部併合を受け, 部分格を付与される．

(16)a. [_{VP} v-remain_[PART] [_{PredP} D_[] traces of which drugs [_{Pred'} Pred [_{PP} in the
blood]]]]]

b. [_{VP} /D_[PART] traces of which drugs/ [_{v'} v-remain_[PART] [_{PredP} {traces of which
drug} [_{Pred'} Pred PP]]]]]

派生の次の段階では, (17a)に見られる様に v-/remain/は編出し VP と併合し v の投射が形成される．そしてこの v は Deal (2009)に従い, (17b)に見られる様にその指定部に there の併合を要求する．

(17)a. [_{VP} v-/remain/ [_{VP} /D_[PART] traces of which drugs/ [_{v'} {remain} [_{PredP} {traces of
which drugs} [_{Pred'} Pred PP]]]]]

b. [_{VP} there_[] [_{v'} v-/remain/ [_{VP} /D_[PART] traces of which drugs [_{v'} {remain}

[_{PredP} {who} [_{Pred'} Pred PP]]]]]

さらに(17b)に $C_{[uF]}-T_{[NOM]}-did$ が併合すると(18a)の様に MP が形成される。さらに(18b)の様に $C_{[uF]}-T_{[NOM]}-/did/$ が併合し TP が形成される。そして(18c)に示す様に *there* は TP 指定部に内部併合を受け主格を付与される。

- (18) a. [_{MP} $C_{[uF]}-T_{[NOM]}-did$ [_{VP} *there*_i [_v *v-/remain/* [_{VP} / $D_{[PART]}$ traces of which drugs/ [_{v'} {remain} [_{PredP} {who} [_{Pred'} Pred PP]]]]]]]
- b. [_{TP} $C_{[uF]}-T_{[NOM]}-/did/$ [_{MP} [_{VP} *there*_i [_v *v-/remain/* [_{VP} / $D_{[PART]}$ traces of which drugs/ [_{v'} {remain} [_{PredP} {traces of which drugs} [_{Pred'} Pred PP]]]]]]]]]
- c. [_{TP} *there*_[NOM] [_{T'} $C_{[uF]}-T_{[NOM]}-/did/$ [_{MP} [_{VP} {*there*} *v-/remain/* [_{VP} / $D_{[PART]}$ traces of which drugs/ [_{v'} {remain} [_{PredP} {traces of which drugs} [_{Pred'} Pred PP]]]]]]]]]

さらに $C_{[uF]}-T-/did/$ が(18c)に併合すると(19a)が得られ、C が持つ[uF]によって *of which drugs* が CP 指定部に内部併合を受け(19b)が得られる。

- (19) a. [_{CP} $C_{[uF]}-T-/did/$ [_{TP} *there*_[NOM] [_{T'} [_{MP} [_{VP} {*there*} *v-/remain/* [_{VP} / $D_{[PART]}$ traces of which drugs/ [_{v'} {remain} [_{PredP} {traces of which drugs} [_{Pred'} Pred PP]]]]]]]]]
- b. [_{CP} /*Of which drugs/* [_{C'} $C_{[uF]}-T-/did/$ [_{TP} *there*_[NOM] [_{T'} [_{MP} [_{VP} {*there*} *v-/remain/* [_{VP} / $D_{[PART]}$ traces {*of which drugs/* [_{v'} {remain} [_{PredP} {traces of which drugs} [_{Pred'} Pred PP]]]]]]]]]]]

前置詞句 *of which car* の摘出は改訂不活性条件を破っていない。

第6章 Summaries and Conclusions

この章は本論文の結論である。本論文では、Tonoike (2008)による編出分析と改訂不活性条件によって、Chomsky (2008)の分析が誤って排除していた(1)をうまく生成することができることを示した。

- (1) *Of which major is it important for the students to take a course in physics?*

さらに、Tonoike (2000)による *wh* 移動は焦点化素性によって駆動されるという分析を採用することにより(2a)がうまく排除することができ、(2a)の文法的な対応文として(2b)が生成できることを示した。

- (2) a. **Of which car did the driver cause a scandal?*
b. *The driver of which car caused a scandal?*

さらに、(3a)の *for* 痕跡効果、(3b)の *that* 痕跡効果、そして(3b)の文法的な対応文(3c)も、編出分析と改訂不活性条件によって説明可能であることを示した。

- (3) a. **Who is it important for t to take a course in physics?*
b. **Who do you think that t will see Mary?*
c. *Who do you think t will see Mary?*

また、主語の取出しを可能にしているメカニズムが、一見すると改訂不活性条

件を破っているように見える目的語の取出しを可能にしていることを見てきた。

最後に(4)の受動文の主語からの部分摘出が可能なことを，受動態を構成する αP を想定することによって派生可能だということを示した。そして部分摘出を受けていない文法的な文(4b)も派生可能であることも示した。

(4) a. Of which car was the driver arrested?

b. The driver of which car was arrested?

また非対格動詞の主語の部分摘出も派生可能であることも示した。

(5) a. Of which drugs did traces remain in the blood? (Radford 2009:437)

b. Of which drugs did there remain traces in the blood? (Ibid.)

以上の分析が妥当なものだとすると，編出分析と改訂不活性条件は普遍文法の一部を構成すると結論付けることが可能である。